

6. 森林インストラクターをめざして

安代営林署 ○ 葛西 貢治
新岡 英仁
桜 昭二
前田 丈

1. はじめに

近年、都市住民のレクリエーション活動は、“する”という機能に重点をおき、自らが体験するなかで喜びを感じる、体験型のレクリエーションの方向へ変化してきている。

このような変化は、森林とのふれあいを求める「森林浴」が、爆発的なブームになって以降、活動空間の広い森林へと向わせ、森林レクリエーション需要を増大させる傾向にある。

こうした最近の国民の要請の高まりに対応して、林野庁は、森林インストラクター制度を創設した。国有林野事業の有する知識・技術を提供することにより、森林レクリエーション利用者に対して、森林に対する知識の普及と一層の理解を得ようとするものである。

しかし、森林インストラクターの活動の理念や理論が未成熟であると共に、森林インストラクターとして対応できる職員不足、系統的な人材の育成など確立するに至っていないのが現状である。

本研究は、安代営林署における森林インストラクターの養成と活動のためのマニュアル作成を試みたものである。

2. 森林インストラクターの現状

(1) インストラクターの定義

インストラクターとは、三省堂広辞林によると、「教師、指導者、特に企業経営に関する訓練を行う講師」となっている。

また、岩波書店の広辞苑では、「指導員、特に機器操作など特定の技能の訓練を行う人」とある。

よって『指導員』、それも極めて限られた分野を高度かつ専門的知識と実技を通じて訓練を行う指導者と解される。

(2) 外部団体における野外活動指導員の養成

野外活動に関わるインストラクターは、現在、日本レクリエーション協会において、レクリエーションを指導する人の資格認定を行っている。また、自然保護協会は、すでに6,000人にも及ぶ『自然観察指導員』を養成しているといわれる。

学校教育関係では、東京学芸大学に「野外教育実習施設」が設置され、『環境教育解説員等』を配置して、訪問者への教育文化サービスを行うシステムの確立を急いでいる。

一方、国立や都道府県の博物館には、『学芸員』という肩書をもつ人がいるが、資料の収集・調査研究などを行う博物館の専門職員であり、博物館法で定める資格を要する。

いずれも、学術調査の各々の分野の専門員や動植物の観察等に限られたものであり、森林という奥深く広大なフィールドを網羅できるインストラクターではない。

(3) 安代営林署における活動

これまで安代営林署は、学校や地域からの要請に対して、課長クラスを中心にインストラクターを派遣してきた。しかし、森林植生等の個別の分野の精通者であり、野外活動を総合的に指導できるものではない。

森林インストラクターとなれば、森林について科学的に把握すると共に、林業・林産業は勿論のこと、森林レクリエーション活動、森林文化など幅広く精通しておかなければならない。

従って、今後は森林・林業を総合的に解説できる人材の育成が急務であるため、担当区主任などを対象に八幡平・安比高原にかけての植生調査を実施し、職員の養成に乗り出した。

これまでの山官から、森林インストラクターを兼ね備えた『森林官』へ転換を図って行く試みである。

3. 地域調査による養成と情報の蓄積

(1) 管内の生物分布

八幡平地区には、わが国有数のアオモリトドマツの群落があり、八幡沼から黒谷地湿原にかけて乾湿両様、多種類の高山植物が群生している。

森林植生は冷温帯林が大部分を占め、下部のミズナラ林から、上部に行くに連れてブナ林となる。ブナ林の上部は、ブナとアオモリトドマツ、コメツガが広く分布し、標高約1,500m前後からハイマツが現れる。標高約300m～約1,600mにわたっているため変化に富み、安代が誇るべき植生である。

さらに、哺乳類、鳥類、爬虫類及び両性類、魚類、無脊椎動物等については詳しい調査が行われておらず、不明の点が多いが、多種多様な動物類が生息していると想像できる。

(2) 地域調査と森林インストラクターの養成

我々が、森林インストラクターとして活動していくためには、まず、地域内に分布する植物、生息する動物類についての掘り起こし、洗い出さなければならない。

従って、安代営林署管内の植生調査、生息調査、分布調査等のフィールドワーク（地域調査）を通じて森林インストラクターを養成して行くこととした。

平成元年度は、カード式野帳を作成し八幡平山・安比高原を中心に、業務の傍らに植生調査を行った。

その結果、草本類250種、木本類85種、高山植物70種、シダ類5種、菌類50種の生息を確認した。

(3) 地域調査の取りまとめと情報の蓄積

動植物を例にとれば、収集した情報を高山植物、野山の植物、草原の植物、湿原の植物、水中植物、荒れ地植物等、あるいは、薬草・薬樹等に分類し取りまとめた。

これを基に山野草の開花地図を作成すると共に、「昆虫の森」や「野鳥の森」に生息する動物類の地図の作成も試みた。

また、植物、動物などと人々との結び付き、接点などを見つけ出し、短文でまとめ、マニュアル作成の土台とした。

そして、この植物や動物カレンダー地図とカード式マニュアルを併用し、森林インストラクターを実践して行くものである。

(4) 今後の進め方

2年度以降は、さらに詳しい植生調査を継続実施すると共に、森林総合研究所や東北林木育種場などの御協力を得ながら、鳥類や昆虫類の生息調査をおこないたい。

これらに加え、哺乳類、爬虫類や両性類、魚類など、逐次拡大して行くと共に、最終的には、安代町内の文化遺産や民俗史などの地域調査を実施し、情報の収集を図る方針である。

一方当安代営林署においては、昭和27年以降先輩諸兄が残した貴重な調査データがある。これらと今回の調査を比較研究し、レポートとし取りまとめていけば、学術的にも貴重な文献が作成できる。

自然環境に恵まれていると共に、動物との生息などは未開の部分が多いことから、これらの地域調査はやりがいのある仕事である。

4. マニュアルの作成

(1) 対象者の分析

八幡平地域森林レクリエーションエリアの野外活動施設の整備状況を見ると、国有林野内スキー場（松川、藤七、東八幡平、安比）、国有林野内キャンプ場（松川）、勤労者野外活動施設（西根）、自然休養村（前森山麓）、自然休養林（松川、南八幡平）、昭和の森（松尾村）、生活環境保全事業（安比）、国民保養温泉地（八幡平温泉郷）、国民休暇村（岩手山麓）等々着実に整うと共に、社会教育事業として野外活動教育が盛んになっている。

ここ10数年間の修学旅行を見ても、スキー修学旅行は一般化し、最近では、農林業体験などの修学旅行も増えている。農山村地域に、ゆとりある「心の教育」を求めていると思われる。

すなわち、森林内での活動は子供から青年男女、さらには老人までがそれぞれ趣向を凝らして楽しみたい。さらに、緑資源としての森林の育成作業を通して、生涯教育やレクリエーション活動の一環として実践したいといった、様々な意向が強く現れている。

従って、老若男女様々な人たちを対象とした森林インストラクターマニュアルが必要であるが、しかし今回は、特にインストラクターとしての要請が多い、小学校高学年から中学校向けのマニュアルを作成することとした。

(2) マニュアル作成上の留意事項

このマニュアルを作成するに当たり、新小学校学習指導要領や安代町で使用されている4～6年生の社会科教科書、並びに社会科・林業等の補助教材を分析し、次の点に留意しながら作成した。

ア、子供たちに知識欲や夢を与える内容とし、小学生が十分理解できる程度の短文にまとめた。

イ、カラー写真やイラストを利用し、視覚に訴えるように工夫した。

ウ、安比高原とその周辺に限定した「地方」にこだわると共に、この地域に生息する動植物と人々や物とのつながりについて、発展性もたせるよう心がけた。

エ、森林の働きについて触れると共に、安代町の町木でもあり、近年、特に話題が多い、ブナの木やブナ林について重点的に解説し、正しい理解が得られるよう試みた。

オ、国際化が進展してる現状に鑑み、林業技術先進国としての日本の役割について触れてみた。

最後に、作成したマニュアルを小学校4年生に読んでもらい、十分理解できる内容であることを確認した。

(3) 作成マニュアルの解説（別紙マニュアル参照）

ア、安比高原

風景を楽しむばかりでなく、自然観察や野外スポーツに利用できる安比高原の紹介

イ、春の訪れ

雪解けを待って咲く可憐な早春の草花の紹介。

ウ、山のごちそう

春一番の新鮮な野菜、山菜。

エ、安代の湿原

生きてる大地、湿原の移り変わり。

オ、高層湿原の植物

目まぐるしく変わる、高層湿原の美しい草花。

カ、瀬戸谷地の開田

湿原がいろいろなものに利用されている様子。

キ、昆虫の森

一生懸命生きる虫たち。

ク、緑のダムのひみつ

水をたくさん貯える、ブナ林の素晴らしい力。

ケ、若いブナ林

ブナ林と山里の人々のつながりの様子。

コ. 漆器と木地屋

ブナの木が、伝統的な漆器製品になるまで。

サ. ブナの分布とすみ分け

ブナの木の水分布と垂直分布、いろいろな木々すみ分け。

シ. ブナの木が大きくなるまで

ブナの生長の過程と、その生理。

ス. 縄文時代を支えた森

縄文時代の人々の食料になっていた木の実。

セ. 虫の夕食・ブナの朝食

ブナの木と虫たちが、もちつもたれつ生活している様子。

ソ. ブナは知っている

ブナの木と人々の対話。

タ. 森のマドンナ

ヨーロッパのブナの愛称と日本の山村の様子。

チ. 緑の国際協力

熱帯地方で進む森林の砂漠化と日本の役割。

以上、17項目について作成した。しかし、この中には安代において特に重要である高山植物や鳥獣類、あるいは林業については触れられなかった。

また、説明不足のため誤解を受けかねないものもある。これら不十分なものや説明不足の点については、次号のマニュアルで補完して行きたい。

5. おわりに

今回のマニュアル作製で、より高度な写真撮影技術や童話などを書ける文学的知識、スケッチや絵画などの芸術センスも備えなければと痛感した。さらに、フィールドワークで収集した情報の管理技術の修得も必要である。また一方では、レクリエーション活動あるいは不測の事態に備えた救急法指導員などの各種資格も取得しなければならない。これらは、長い年月を必要とすると共に、前途多難である。

しかし、今後成長が予想されるのは、安比高原を中心としたリゾートなどのサービス産業であり、森林を舞台として文化・教育的産業への展開である。国有林野事業においても、木材生産に片寄った林業から、知識集約型の複合的な森林業へと転換を急がなければならない。

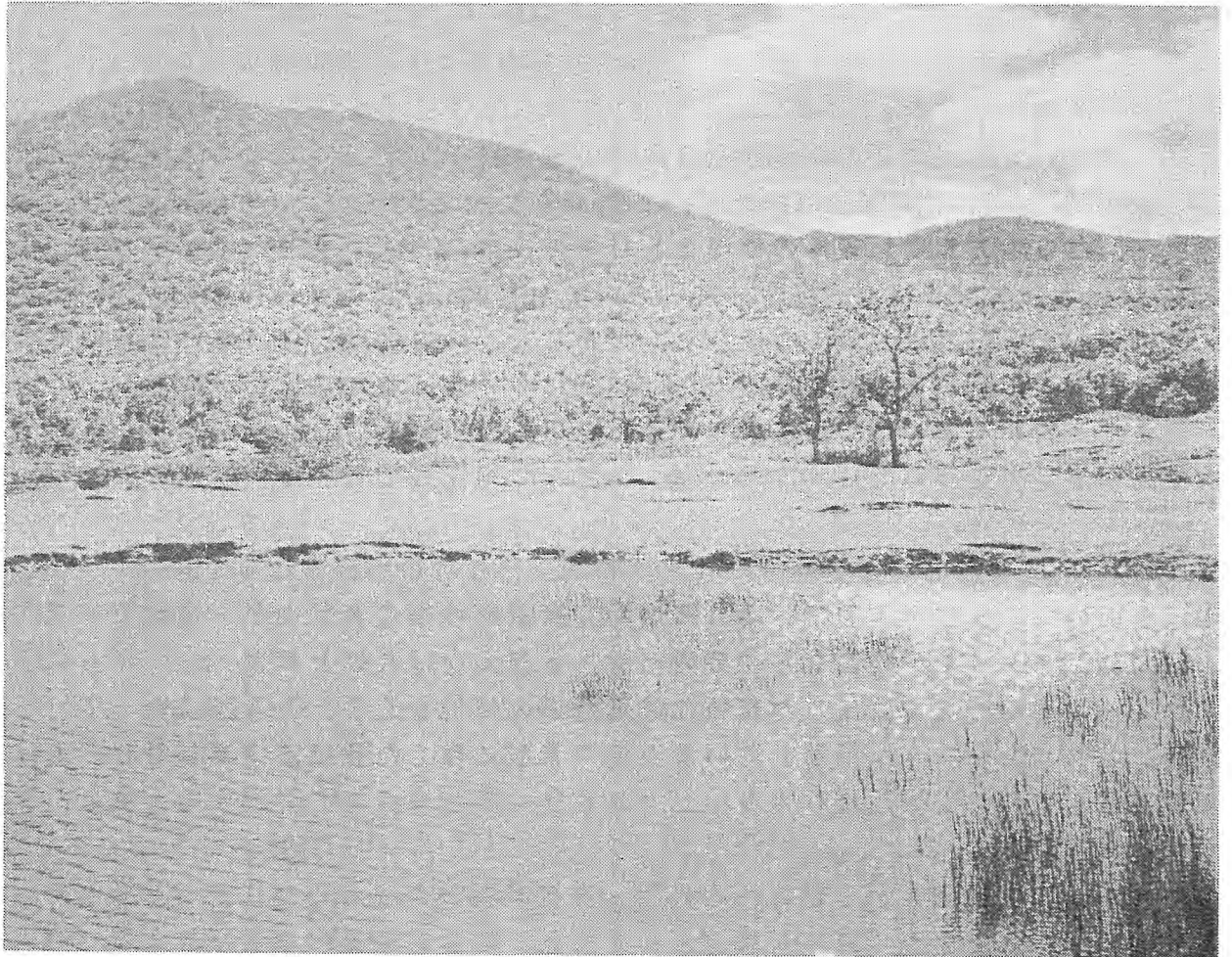
新年度において森林インストラクターの受託業務を実施したいと考える。そして近い将来、安比高原森林レクリエーションエリア内に新町担当区事務所を移設し、活動の拠点とすることを提案する。

なぜならば、自然界の多様な構成物を識別・整理・蓄積して、知識や技術を新しい世代に伝承していく機会をつくることは、私達、森林・林業に携わる職員の義務だからである。

森林インストラクターマニュアル

No1号

安比高原



青森営林局
安代営林署